

旧中島地区被爆遺構の展示整備に関する懇談会

広島市市民局国際平和推進部平和推進課

2020.1.29

『旧中島地区被爆遺構に関する証言』

設問1／被爆前・被爆当時の旧天神町筋の街並み等（募集要項より）

幼年期を過ごした旧中島地区「天神町北組」は、私の「ふるさと」です。今ではイリュージョンの世界ですが、昨年暮れ、嘗ての「天神町筋」を改めて歩きました。本日は、皆さんをそこへご案内します。町名由来の「天満宮」が今でも土谷病院の東にあります。そこから北に向う平和大通りまでの細い僅かな道路が「天神町筋」の唯一の名残であると想像できます。天神町を分断する無骨な「100^m道路」を超えると、昔の面影が消えた平和公園に入ります。今のタクシー乗り場のあたり、天神町146番地、伯父が経営する「山崎印刷所」が左手にあります。そして、そこには、私を可愛がってくれた伯母の姿も見えます。「山崎印刷所」は、強制建物疎開地域の境界から4軒目で取り壊しから免れたため、伯父と伯母はそこで爆死しました。ここには、もう一人の伯父と従姉が同居していましたが、彼らも亡くなりました。更に北に進むと、丁度、資料館東館の中央、「新橋筋」で南組と北組を分ける「ゆうれい小路」を横切ります。すると、「被爆アオギリ」の東側に「軍用旅舎・天城旅館」の立派な門柱が見えます。天神町59番地の天城旅館は、出征する兵士たちが最後の夜を家族と一緒に過ごしたという悲しい話が残るところです。私たち家族が寄留していたこの旅館の主、「天城慶一さん」は、多くの泊り客や従業員と共にここで亡くられました。更に、中島新町の建物疎開のため「天城旅館」に寄留されていた「梅村量助さん」一家もここで亡くられたと「爆心地復元地図」に記録されています。もし、私たち家族が、原爆投下5か月前の3月18日にここから疎開しなかったら、復元地図の上に、天城旅館「森川入居」と書き残されていたことでしょう。「天城旅館」の北隣、天神町52番地には「進藤小児科」がありました。私もお世話になったお医者さんです。進藤先生と奥さんは疎開先から医院に向かう途中で亡くられたとの記録があります。私の父が遺した日記には、「隣組の常会」が進藤医院で開かれ、衣類の疎開についての話し合いが行われたことが書き残されています。更に、「かさもり小路」を超え、ゆつたりと円弧を描いて北へ進むと「天神町筋」が終わり、嘗て「西国街道」と呼ばれた「中島本通り」に入ります。そして、右手に「燃料会館」が見えたところで私の郷愁の旅、「天神町筋歩き」は終りとなります。もし、皆さん、ご興味があれば、実際に「天神町筋」をご案内します。

設問2／旧天神町筋一帯の街並みや暮らし（中国新聞記事より）

多くの記録に、旧・中島地区は市内有数の繁華街として栄えていたと書かれています。スズラン灯が輝く街は、カフェやビリヤード、映画館で賑わう大正・昭和初期の様子が思い起こされ、あたかも、そこに原爆が投下されたように、読む人の想像を掻き立てます。私にはそんな記憶はありません。私が生まれた昭和14年は、既に日中戦争が始まっており、続く太平洋戦争開戦は、日本中を戦雲で覆い、全てが戦時色一色になっていた記憶しかありません。旧・中島地区も例外ではなく、強制建物疎開で住むところを追われ、食糧・着るものは配給制度、学徒動員・防空演習で明け暮れる暮らしを強いられていました。そんな中で「天神町筋」は、商店や医院、普通の人達が暮らす木造家屋が軒を並べる普通の街でした。

設問3／出土した住居跡の状況（募集・選考依頼より）

（1）住居跡の特定

私は、出土した住居に関する知識はありませんが、関心は人一倍、抱いています。手元に中国新聞とNHK出版の2つの中島地区復元図があります。「天神町筋」と「かさもり小路」の交差点から南に向け、「寺西（あめ製造）」、「松田商会（自転車商）」、「桑原商店倉庫」、「加藤（材木店又は元桶材商）」、「加納・武田」、「二宮印刷所」等が読み取れ、ほとんどのお宅が、所謂「ウナギの寝床」のように、短冊形に表現されており、出土した住居跡との特定は困難です。出土した住居跡が前述のいずれかを特定することが喫緊の課題です。昨年7月以来、住居跡の位置座標を確認し、残された米軍空撮写真に落とし込み、その位置を確定する可能性を話し合ってきました。更に、前出の米軍空撮写真の高・解像度デジタル化で、被爆前の家屋の位置・形状を三次元化することも必要であると、私たちは考えています。こうしたGISデータ処理技術を駆使すれば、遺構候補地として、住居が特定できるものと私は確信しています。その結果、嘗てそこに生活していた人々の「生と死」の物語に行きつくことができます。今の段階で、出土した住居が「加藤（材木店又は元桶材商）」と断定することは避けた方がよいと思います。

（2）被爆後の中島地区の復興

被爆後、疎開から復帰して中島地区に戻ってきた人々が、8月下旬には慈仙寺跡に焼け残った廃材を利用してバラック小屋を作り住み始めました。10月頃には材木町と水主町に、12月頃には中島本町にと次第に増えてきまし

た。言い換えれば、被爆表土の上にバラックが密集していったこととなります。その様子は、写真家・菊池俊吉と佐々木雄一郎の写真集に見られます。その後、中島地区では、平和記念都市建設法に基づく資料館の建設が、昭和26（1951）年に、更に、平和公園の建設が昭和27（1952）年に、それぞれ開始され、整地作業が南から徐々に進行し、密集するバラックは次第に姿を消していきました。この時のバラックの撤去作業が天神町北組でも行われたと想定すると、遺構候補地から出土した炭化した木材と畳が、果たして、原爆の高温で焼かれたものか、バラック廃材の焼却処理でそのようになったかの検証が必要と考えました。それを判定する方法は極めて簡単です。サンプルの残留放射能を測定すればわかります。昨年末、私の父が遺した「臼齒」の残留放射能の測定を広大の星 正浩・名誉教授にお願いし、 450 ± 50 mSvの結果を頂きました。自然界で浴びる日本人の平均被爆量が、年間 2.1 mSvであることから、父は多量の原爆による放射線を浴びたことが分かりました。ご参考までにどうぞ。

提言：『被爆遺構の保存を促進する会』

私は、ここに来る前、慰霊碑に参拝してきました。石棺に刻まれた碑文を読み返し、祀られている私の両親を含む31万9,186人の方々に、安かにお眠りくださいと祈りました。平和公園を訪れた時の私のルーチンです。更に、碑文には「過ちは繰り返しませぬから」とあり、ここを訪れた人の「核廃絶を誓う力強いコミットメント」を表しています。

本日私は、嘗て天神町に住んだ者、原爆被爆者という立場のほか、「被爆遺構の保存を促進する会」（保存の会）からの推薦を受けてここにいます。100名の会員を擁する「保存の会」は、これまで3年間、勉強会、研修会などを通して、各種の提案・提言を行い、遺構の展示整備事業を応援してきました。時間をかけた試掘作業がようやく終わり、遺構の展示・保存、そして、有効活用という夢が近づいてきたことを実感しています。「原爆被爆遺構とビジターとのインターフェイス」という舞台へ市民の出番が近づいた感じがします。ここで提案ですが、一度立ち止まり、現状を再評価してみたいかがでしょうか？ 先週、私たちの「保存の会」の世話人会が開かれ、色々な意見が出されたので、参考までに以下述べさせていただきます。

(1) 「被爆遺構」のあるべき姿

私たちが描いているのは「原爆被災遺構」であり、一般に言われる、戦争そのものに関わる戦跡、軍事遺跡、軍事施設、被災建物などを指す「戦争遺跡」ではありません。74年前、そこには人の営みがあり、生きる喜びがありました。しかし、「悪魔の爆弾」により、一瞬にしてすべてを失いました。それを証明するために、60センチの表土を除き、止まった時と失ったものを取り戻す、という「原爆被災遺構」の実現に動き始めた筈です。それは、世界から訪れるビジターに強力なメッセージを与え、「核兵器廃絶」という大きなうねりとなっていくことを信じているからです。想像してみてください。今、出土した遺物である道路の縁石、焼けた木片と畳が、見る人にどのくらいのインパクトを与えるのでしょうか？

(2) プロジェクトの進め方

「保存の会」の過去の活動記録を読み返してみました。事業主体者との話し合い議事録、市長への要望書の中に、一貫して『旧住民や被爆者をはじめとする市民の意見を幅広く聴く』、そして、『パブリックオピニオンを十分に取り入れ、積極的に情報提供をし、オープンに進めていく』ことが述べられています。行政の中に、法令で「有識者懇談会」を設けることは認められていますが、強力な市長のリーダーシップのもと、「原爆被災遺構」は「核兵器廃絶」という課題実現のための強力な手段であることを、それに携わるもの全員が再認識し、この後に予定される「展示設備の整備の方向性」の討議でご審議頂きたく、お願いいたします。